

ずいそう

## 東日本大震災に思う

岸野 佑次



平成23年3月11日の午後、私は協会の委員会の用事で川口に居た。この委員会では一昨年度より厚労省の委託で、外国人研修生・技能実習生の学習の実が上がるように実習支援マニュアル、とくに技能評価シートの作成に携わってきた。当日は最終段階として、評価シートを実際に外国人実習生に見てもらい、その有効性を確認するためのインタビューを行うことになっていた。施工技術総合研究所の竹之内氏、協会本部の齋藤氏らと下打ち合わせを行った後、実習先の会社に徒歩で向かっていたとき、突然の激しい揺れ。この顛末については後ほど記すこととし、まず、委員会に関して少し触れておきたい。

高度な技術を身につける上で、まず学習資料を基に通りのイメージを持つことはその技術を有効かつ安全に使う上で大切なステップである。この段階で学習資料が整っていることが大切であるが、建設機械に関してJCMAは孤高のポテンシャルを有している。件の委員会「実習支援マニュアル作成委員会」は、委員長を除き、関連分野をリードする専門家よりなるメンバーにより構成され、建設機械操作に関する技能をいかにわかりやすく外国人に伝授するかについて熱い議論が重ねられてきた。技術者として夫々の職責を果たしてこられた皆さんの自負を背景とした議論を拝聴しながら、私は技術や技術者とは何かについて思いを馳せていた。

以前、スイスの登山電車の車窓から見えた道路橋の橋脚があまりにも細長いを見て、思わず向かいの席に座っていた一人の外国人旅行者に、「日本の橋脚はこんなに細くない。何故か分かるか？」と聞いたところ、「知っている。僕はエンジニアだから」と胸を張った答えが帰ってきた。そこには医者や弁護士などのスペシャリストに通じる誇りを見て取ることができた。また、フィレンツェで、博士号を持つ市の職員OBからアルノ川にかかる橋梁群についての説明を受けたことがあるが、橋のひとつひとつを、まるで、我が子を紹介するかのように嬉々と説明する姿に接した。人々の豊かな生活の基盤、或は、文化都市の基盤を創り上げたいという思いに対して、それを実現するための手段としての技術が過不足なく応えることができたとき、そこに携わる技術者はこの上ない充実感を覚える。このことは大いに誇るべきことと思われる。

上述の委員会は我が国に蓄積されてきた建設機械操作のための技術を発展途上国などと共有するために外国人実習生向けの教材をつくることを目的としていた。初年度に作った上級者向け評価シートがかなりの日本語能力を要すると判断されたことから、初級者向けの評価シートについては日本語を学び始めたばかりの外国人に理解できることを最大の目標とし、文体をですます調の話し言葉にするなど、ユーザーフレンドリーを旨とする万全の工夫を重ねてきた。このシートを携えて、実習生にインタビューすべく実習先の会社に向かっていたところに継続時間の長い大地震。体に揺れの感覚が残る中、会社の2階建て建物2階の事務室にたどり着いたところ、待機していた実習生の体はこわ張り、顔に恐怖の色が浮かんでいた。

怖かったのは我々も同様であった。とくに私は震源が宮城県沖と聞いて一刻も早く仙台に戻らなければと思ひ、皆より一足先に会社事務室を出た。しかし、全ての電車が止まり、首都圏内の移動も儘ならない状況であった。バスを乗り継いで何とか浦和に着いたが、そこから先に移動することは諦めなければならなかった。我々出張者には勤務先に戻るという選択肢はなく、何としても宿を見つけなければならない。駅近くのホテルは既に満室。しかし何とか健康ランドに避難することができた。私と同時に上京していた家内は地震時新幹線で仙台に向かっていた。地震により列車は矢板付近で緊急停止。停電のため照明も暖房もない中、12時間以上列車内に閉じ込められた。深夜にバスで避難所に収容され、短い仮眠を取った後、動きはじめたJRで都内に向かった。このときから3月一杯、家内と私は川崎の実家で過ごすことになった。

東日本大震災を通して、地震時に全ての新幹線を自動的に止め重大事故を防ぐことができたことなど、目指すことに対して身の丈の技術を獲得しているものも多いことが示された。しかし、福島第一原子力発電所の事故は今なお広範囲に亘る地域を危険に曝している。ある危険レベル以上のことに関しては全く思考停止してしまうような技術は身の丈のものではない。我々は有限な資源の地球上で、無制限の利便性を追求することはできない。いま、「足るを知る」機運が生まれつつあるようにも思われる。